

# 自立活動だより No.5

令和6年1月19日

自立活動部

## 乳幼児教育相談 ～保護者学習会「音楽療法」の様子～

今年度は、初の取り組みとして、「音楽療法」を保護者学習会で取り組みました。以前、小児医療センターのベビー外来（精密検査の結果難聴と診断された赤ちゃんと保護者が集う場）で、音楽療法を担当されていた音楽療法士の村上か乃氏を講師としてお招きしました。対象は、0歳児・1歳児、14家族が参加しました。

直径120cmほどの大きなギャザリングドラム2つに赤ちゃんを座らせたり寝かせたりして体で振動音を感じながら、「お名前呼び・あいさつ」が始まります。その後「ふれあい遊び（ぞうきん・だいこんさん）」次は、曲のスピードに合わせてママやパパに抱っこされ、走る・歩く動きで、きこえない・きこえにくい赤ちゃんにリズムが伝わるように行います。手話歌は、幼稚部の戸田先生に参加してもらいました。その他、スカーフ遊び、パラバルーン遊びと、親子で楽しい学習会となりました。

参加者の声

○大きな太鼓の振動が楽しそうでした。集団でやるのは初めてだったので貴重な体験をさせてもらいました。

○動きながら音を楽しむことを普段しないので、とても良い刺激・勉強になりました。

○パラバルーンは初めてでしたが目をキラキラさせて喜んでいました。とても楽しかったようです。

## 幼稚部 ～ろうの子どもたちの学びを支える「ろう保育」～

～ろう学校幼稚部ならではの保育「ろう保育」～

幼稚部は、ろうの子どもたちが一緒に遊び、一緒に生活をする場でもあります。ここには、手話という言葉があり、ろう文化が根付いています。子どもたちは“目（視覚）”を使う自分たちに適した遊び方や生活様式を編み出しています。「ろう保育」とは、ろう学校幼稚部ならではの保育を通して、子どもたちの「ろうとしての自分探し」を支えます。

～「デフフード」の学び～（本校の重点目標にも記載されています）

「デフフード」という考え方は、聴覚に障害があるという捉え方（医学モデル）ではなく、言語として日本手話を使い、ろう文化の中で生きるという捉え方（文化言語モデル）を基にした概念です。幼稚部では、子どもたちが自分らしく生きる「デフフード」の視点も大切に保育を行っています。大人がスマホを耳に当てて声で話している様子を見ている子どもたち。遊びの中でもスマホを作り、友だちとやりとりを楽しもうとします。しかし、大人と同じ方法を真似して声だけでは通じません。お互いに視線が合うまで待つ、スマホを持ち片手のみで手話をする等、どのような方法を使えば通じ合えるのかを子ども同士で共有しあえることで、それが「ろう文化」として根付き、継承していくことになります。子ども自身が視覚を使って生きる方法を模索していく中で、「デフフード」の学びがあります。その学びを保障することこそが、ろう学校の専門的な役割であると考えます。